

第一部 現存在を時間性へむかって解釈し、存在への問いの超越的地平として時間を究明する

第一編 現存在の準備的な基礎分析

第一章 現存在の準備的分析の課題の提示

第九節 人間学、心理学および生物学に対する現存在の分析論の境界設定

概要

現存在の実存的分析論を人類学、心理学、生物学と区別することによって「人間とは何であるか」についての実存論的分析論の必然性を明らかにする。

現存在を目標として行われてきた問題設定や考究は「本来の哲学的問題」（存在論的な問い）を取り逃している。（人類学、心理学、生物学などは存在論的な問題設定から起こるべき、新しい衝動を必要としているが、それを助けたくても哲学側の存在についての問題設定が不十分。）

まず、哲学史による実存論的な分析論の意図の説明を行う。デカルトの「われ思う、われあり」を例にとって、存在論的な問いが不十分であることを説明する。

ただし、デカルトの例では、「思う」のところで最初から自我や主観が与えられているという誤解をさせてしまうかもしれない。そこで、主観、心、意識、精神、人格などの物性そのものの存在論的な由来を示す。同様の理由で表現も避けている「生」や「人間」という言葉についても存在論的な検証を行う。

まず「生の哲学」においては、「生」そのものが存在論的に問題とされておらず、という原理的欠陥がある。

人格を実在や価値の最高原理とする人格主義においても、「人格として存在すること」そのものをたずねる問いを立てていない。

そして、身体、心、精神のなどよりも先に、統一された全体の存在を規定するべきとした。それ自体まだ規定されずにいる身体、心、精神という存在様相をもとにして（それらを別とみなして）人間の存在を加算的に組み立てるわけにはいかない。

それにもかかわらず、全体の存在が問われないのには、古代的＝キリスト教的人間学による原因がある。

ギリシアの人間の定義「ロゴスを持つ動物」では、「ロゴス」の存在様相が不明。キリスト教における人間の定義では、その中の超越思想における存在様相が不明。

伝統的な人類学にとって人間を規定するための源泉は、ギリシア的な定義とキリスト的な手引きであり、存在様相が不明な点がある。さらに、近世でも人類学の問題設定は存在論的基礎を規定していない。

心理学と生物学でも存在論的基礎が欠けている。存在様相の問題はそれらの学問の根本に位置する。

前回までの復習 P115_L5 現存在の実存的分析論を人類学、心理学、生物学と区別することによって「人間とは何であるか」についての実存論的分析論の必然性を明らかにする

存在問題について実存を通じて考えることの他に、同じくらい重要なこととしてほかにやろうとしていることがある。それはアプリアリな原理をあらわにする、ということである。これは「人間とは何であるか」という問いを哲学的に究明できるようにするために明らかにしなくてはならない。

現存在の実存的分析論は、心理学、人類学、まして生物学よりも先にあるものである。しかし、心理学、人類学、生物学も現存在を考究しうる。

そのため、我々の分析論をこれらと区別することで、分析論の主題がはっきりと見えてくる。また、それと同時に我々の分析論の必然性もなお切実に証明できる。

P115_うしろからL1 現存在を目標として行われてきた問題設定や考究は「本来の哲学的問題」（存在論的な問い）を取り逃している

現存在を実存論的に分析するときにはしてはならないこと（禁止的規定）をはっきりとさせる。そのために、人類学、心理学、生物学との境目を定める。

ここからは、これまでに現存在を目標として行われてきた問題設定や考究は「本来の哲学的問題」（存在論的な問い）を取り逃している、ということ論じる。

今日では、人類学、心理学、生物学の学問的構造が底の底のところから疑わしいものになっている。そのため、それらの各学科は、存在論的な問題設定から起こるべき、新しい衝動を必要としている。しかし、現状、哲学が定めている境界ではそれらに新しい衝動を提供できない。

P116_うしろからL5 哲学史による実存論的な分析論の意図の説明

実存論的な分析論をとる意図を哲学史から説明する。

Cogito sum（われ思惟す、われあり）で、デカルトはCogito（考える）については「ある限界内で」とした。しかし、sum（あり）の単語のほうは、Cogito（考える）と同様に根源的で重要であるのに、まったく考究していない。

本書では、sum（あり）という存在のほうへ、存在論的な問いを向ける。このsumという存在が規定されてこそ、cogitationes（思惟）の存在様相もはじめてとらえられるようになる。

※Cogito ergo sum. 「コーギトー・エルゴー・スム」

cōgitōは「考える」、ergōは「それゆえ」、sumはある、いる、存在する。

英語で全体を訳すと、「I think, therefore I am.」となる。日本語の直訳は「私は考える。故に私は存在する。」となる。

P117_L4 主観、心、意識、精神、人格などの物性そのものの存在論的な由来を示す

哲学史を用いて分析論の意図を説明したが、この最初から自我や主観が与えられているという見方は、人を誤らせやすい。

なぜなら、最初から自我や主観が与えられているという見方は、現存在の現象的実体について根本的にまちがったスタート地点から理解することになるからである。こうなってしまうことを示すのも、分析論の課題のひとつになる。

この根本的な発想を間違えると、存在的にはいくら「心的実体」や「意識の物化」を追い払おうとしても、主観の理念は、存在論的にはsubjectum (ὑποκείμενον, hypokeimenōn) (基体) という見積もりを立ててしまう。(結局、主観を物とみなしてしまう。)

主観、心、意識、精神、人格は物化されないとされる。ただ、物化されない存在をどのような積極の意味で理解すべきか問えるようにするためにも、まず事物の物性そのものを、その存在論的な由来について示しておく(証示(Ausweisung?)しておく)必要がある。

同様の理由で「生」や「人間」という表現も避けている。

※ὑποκείμενον (hypokeimenōn):

ラテン: subjectum

根底にあるもの、基体、他に作用などを及ぼす当のもの。認識論では主観と同義。

※我を張る(がをはる): 意味や解説、類語。自分の考えを押し通して譲らない。

P118_L1 生の哲学の見過ごし

「生の哲学」においては、「生」そのものが存在論的に問題とされていない、という原理的欠陥がある。

※冗語/剩語(じょうご): 意味や解説、類語。むだな言葉。よけいな言葉。また、むだ話。

P118_L6 人格は物や実体や対象ではない(シェーラー)、人格主義の見過ごし

ヴィルヘルム・ディルタイ(ドイツの哲学者)は「生」の体験を「生そのもの」から理解しようとした。彼の「精神科学的心理学」は心的な要素や原子に手がかりを求めようとせず、(また心的生活をこれらの要素から組成しようとしなくて、)むしろ「生の全体」や「形態」を理解しようとした。重要なのは、これらすべてをつうじて彼が何よりもまず「生」への問いへの途上に立っていたという点である。

もちろん、その中では、問題設定や概念構成の限界が現れている。さらに、彼の影響を受けたすべての「人格主義」(人格を实在や価値の最高原理とする考えのこと)的運動や哲学的人間学にも共通の限界がみられる。

現象学の側でおこなわれた人格性の解釈も、結局、現存在の存在へ向かう問いの次元には立ち入れずにいる。フッサールやシェーラーなどの現象学はそれぞれ方法が違うが、そこではどちらも「人格として存在すること」そのものをたずねる問いを立てていない。

シェーラーによれば、人格とは事物的な実体的な存在ではない。さらに、人格の存在は、一定の法則性を備えた理性的作用の主体として存在するわけでもない。

ベリグレン

新トント派のfctty

(シェーラーによれば、われわれは人格を決して事物や実体として考えてはならない。そして、人格とは体験(経験)と新しい体験が合わさる「体験作用の統一」であって、直接に体験される事柄の背後や外側にある、たんに思考された物ではない。)

※「人格主義」：人格を实在や価値の最高原理とする考えのこと。

多岐派

※哲学的人間学：人間が自身に抱く自意識の歴史について、その自意識が突然に増大し続けている現代の事態を解釈するための学問とされる。ハイデッガーは、大学における講義では哲学的人間学に好意的に触れていた時期もあったが、主著『存在と時間』(哲学的人間学への言及は少なくない)において決別の意を明らかにした。

※さ-よう【作用】フッサールの現象学で、なんらかの対象を志向する意識の働き。

P119_うしろからL6 身体、心、精神のそれぞれよりも先に、統一された全体の存在を規定するべき

シェーラーは作用も対象ではない、とのべた。作用は心的でない何かである。人格の本質には、ただ志向的作用の遂行の中でのみ現存しているということが属している。したがって、人格は本質上、対象ではない。

心的存在は人格存在とはまったく無関係である。

作用は遂行される。人格は作用遂行者である。しかしながら、「遂行する」ということの意味はどのようなことであるか。

...

われわれが人間の存在をたずねるときには、それ自体まだ規定されずにいる身体、心、精神という存在様相をもとにして(それらを別とみなして)人間の存在を加算的に組み立てるわけにはいかない。

仮にその方法をとるにしても、存在論的にはそれよりも先にそれら全体(身体的=心的=精神統一)の存在の理念が前提されていなくてはならないだろう。

この問いを妨げることになっている原因は、古代的=キリスト教的人間学を基準に考えていることにある。この伝統的人間学の中には次の二つの要素が含まれている。

P121_L5 ギリシアの人間の定義「ロゴスを持つ動物」の「ロゴス」の存在様相が不明

伝統的人間学(人類学)の要素の一つ目。ここで、人間の定義としては、ζῷον λόγον ἔχον(理性的動物、ロゴスを持つ動物)として解釈された。

ζῷου(ゾウー)は客体的に存在し、出現するものという意味に解されている。λόγος(ロゴス)の方はそれが備えている一段と高貴な資質という意味であり、結局合成された存在者の存在様相と同様に不明のままである。(存在論的基礎が不十分)

※ζῷον λόγον ἔχον, zoon logon echon = animal rationale (理性的動物、動物の理論的根拠、Logosを有する動物)

ζῷον, zōon = 動物

λόγον = λόγος (ロゴス、理性)の対格

ἔχον = to have、持つ

rationale (英) = 理論的解釈、理論的根拠

P121_L10 キリスト教における人間の定義とその超越思想における存在様相が不明

伝統的人間学（人類学）の要素の二つ目。これは神学的な手引きである。キリスト教では、古代的（ギリシア的）な人間の定義をも採用し、人間はens finitum（有限的存在者）と定義された。

近代になって人間の定義は非神格化されたが、もともとのキリスト教の教義学にある「超越」（人間とは自己を超えていくもの）という発想はその後も残った。この教義学が人間の存在を存在論的に問題にしたことがあるなどとは、とても言えない。

※ens=存在すること、有
finitum=有限⇔infinitem（無限）

存在は自己の超越性による
*08

P122_L11 近世でも人類学の問題設定は存在論的基礎を規定していない

（伝統的な人類学にとって人間を規定するための源泉は、ギリシア的な定義とキリスト的な手引き。）どちらでも人間の存在への問いがわすれられてきた。その存在はむしろ「当たり前」のこととして、現存在もほかの被創造物の客体的存在と同じようにみられてきた。これらは、近世の人間学では、res cogitans（思惟する実体）や意識などから出発して研究する方法的態度と関係している。しかし、cogitationes（考え、思考）も存在論的な規定を受けていない。

結局、人間学の問題設定は、依然としてその決定的な存在論的基礎において規定されずにいる。

※res cogitans = 思惟する実体、精神
res = 実体
cogitas = 思考、思惟

デカルトは、空間的広がりを持つ思考できない延長実体（いわゆる物質、ラ：res extensa）と、思考することができる空間的広がりを持たない思惟実体（いわゆる心、ラ：res cogitans）の二つの実体があるとし、これらが互いに独立して存在しうるものとした。この考えはデカルト二元論（Cartesian dualism）と呼ばれ、デカルトのこの説がしばしば実体二元論の代表的なものとして扱われている。

結局、人類学では存在論的に人間が規定されていない。

※cogitationesは「考え、思考」を意味する第3変化名詞cogitatio,-onis f.の複数・主格

P123_L3 心理学と生物学でも存在論的基礎が欠けている

今日の心理学は人間学的傾向を示しているもので、同じことは心理学についても言える。さらに、これらの人類学と心理学とを生物学の中に組み入れても、埋め合わせはつかない。生命は単純な客体的存在でもなくかといって現存在でもない。逆に現存在の方も、存在論として規定せずに、まずそれを生命として見立てた上で、考えはじめても存在論として規定されない。

（生命の存在論は一種の欠如的な解釈を通じて遂行される。すなわち、「ただ生きているだけ」というようなことがありうるための必要条件を定めるのである。）

P123_うしろからL5 存在様相の問題はそれらの学問の根本に位置する

人類学や心理学や生物学には、存在様相についてのきちんとした答えが欠けていることをこれまで述べてきた。

存在様相の問題は、これらの学問の根本的なところに位置する。そして、これらの学問の個別の内容の重要度とは比べ物にならないほどの根本的な問題をはらんでいる。